今夏、ジェーアイシー旅行センターは、モンゴル、中央アジア、バルト諸国、そしてロシアへの企画旅行手配を行いました。ウクライナ戦争開始以来、外務省海外安全情報でロシアがレベル 3（渡航中止勧告）となり観光旅行客が大幅に減っている下で、ロシア・旧ソ連地域専門旅行社としては、モンゴルやカザフスタン、キルギスタンなどへの旅行を中心に企画や手配を行って苦境を凌いできました。嬉しいことに今年は、大阪日ロ協会の勇気ある企画でペテルブルク視察旅行の手配もさせていただきました。以下、今年の夏の旅行の一端をご紹介します。

なお、ペテルブルク視察旅行の報告は大阪日ロ協会の会報から転載させていただきました。バルト三国手仕事の旅は、主宰者であるリニ軽井沢の小林奈美さんからいただいたチラシ形式の原稿をそのまま掲載しました。（編集部）

民主化の志を未来の若者へ

ゾリグ財団との対話とティグレ・モンゴル視察報告

杉浦 信也（ジェーアイシー旅行センター株式会社代表取締役）

2026 年 7 月 31 日から 8 月 5 日までの 6 日間、私たちはモンゴル視察団として首都ウランバートルおよびカラコルム（ハルホリン）を訪問しました。今回の視察には、ティグレ連合会（中小企業の経営支援団体）常務理事の東野秀典氏、同相談役の橋口哲夫氏、株式会社高山化成取締役会長の高山英寛氏をはじめとする有志の皆様とともに、ジェーアイシー旅行センターも実はティグレグループの一員であることから、私、杉浦が参加させていただきました。

ティグレおよび国際親善交流センター（JIC）の創設者である故・上田卓三会長は、1979 年に日本モンゴル親善協会大阪支部を設立し、1992 年に大相撲の大島部屋を通じて旭鷲山や旭天鵬ら 6 名のモンゴル青年を日本へ初めて受け入れるなど、両国の架け橋となる足跡を残されました。今回の視察は、その歴史的絆を確かめ合い、急速な社会変化を遂げる現在のモンゴルにおける具体的な協力・交流の道を模索するために企画されました。

著しい一極集中に直面する首都ウランバートル

現在のモンゴルは、経済成長が進む一方で、全人口 345 万人のうちの約 5 割、企業の約 6 割が首都ウランバートルに集中するという著しい一極集中に直面しています。これにより深刻な交通渋滞や大気汚染、都市と地方との経済格差が社会問題化しています。

この課題に対し、モンゴル政府は古都カラコルム（現地ではハルホリンと呼称）に 50 万人規模の新都市を建設する「ハルホリン新首都構想」を掲げ、都市機能の分散を図ろうとしています。こうした状況を踏まえつつ、今回の旅行で私たちが視察したハルホリン市の新首都構想の現状や、ウランバートルで訪問した「ゾリグ財団」との会合、また新モンゴル日馬富士学園の取り組みなどについて報告します。

民主化リーダーの遺志を継ぐ「ゾリグ財団」

8 月 4 日午後、私たちはウランバートル市内のゾリグ財団（Zorig Foundation）本部を表敬訪問しました。対応してくださったのは、同財団理事長であり元外務・環境大臣のサンジャースレン・オユン氏、エグゼクティブ・ディレクターのツォルモン氏、プロジェクト・オフィサーのブヤ氏です。



ゾリグ財団にて／左から 3 人目がオユン理事長。壁紙の文字は「私はモンゴル人の良識を信じています」と書かれている。

ゾリグ財団は、1990 年のモンゴル民主化運動の指導者であり、1998 年に暗殺されたサンジャスレン・ゾリグ氏の遺志を継ぎ、妹のオユン氏によって同年設立された NGO・公益財団法人です。次世代リーダーの育成、教育支援、環境保全、透明な社会づくりなど、多岐にわたる社会貢献活動を展開し、

これまでに3400人以上の学生に奨学金を支給してきました。ティグレとの間でも２名の奨学生を日本に受け入れた経緯があります。会合が行われたゾリグ財団本部の会議室には「私はモンゴル人の良識を信じています」というゾリグ氏の言葉と写真が掲げられており、その志を継いで若者支援に奔走するオユン理事長らの情熱に強い感銘を受けました。

日本モンゴル高校生ホームステイ交換交流の提案

会合の中でオユン理事長より、「日本とモンゴルの高校生による相互交換ホームステイプログラム」の立ち上げが提案されました。ゾリグ財団では現在、米国との間で高校生の相互派遣交流を実施しています。約６ヶ月間のオンラインによる英語での事前交流・相互理解セッションを行ったうえで、夏休み等を利用して５名程度の高校生を２週間ホームステイで相互派遣するモデルです。オユン氏は「この成功モデルを日本とも実現したい。共通言語を英語に設定すれば、語学力向上だけでなくグローバルな視野を持つ青少年の育成に直結する」と熱く語りました。

私自身、これまでジェーアイシー旅行センターで教育・交流事業に携わってきた経験から、この提案には大きな実現可能性を感じました。これまで研修や交流のお手伝いで関わりのあった高校や団体に紹介し、早期に実現できることを期待します。日本の高校生がモンゴルの家庭に滞在し大自然を体験すること、モンゴルの優秀な高校生が日本の生活や社会に触れることは、両国の未来の架け橋を育む上で極めて意義深い取り組みとなるでしょう。

このほか会合では東野常務理事より、社会貢献活動等を支援する「第 12 回上田卓三賞」の概要が案内され、ゾリグ財団側も関心を示し海外枠で応募を進めることで合意しました。

橋口相談役からは、昨年よりティグレ連合会・ゾリグ財団・JIC の３者で行ったモンゴルのヤクの靴下の販売による募金活動の収益から得られた支援金が寄付されました。財団側からは、かつてゾリグ氏が戦時中の日本人捕虜の遺骨返還事業に尽力した経緯の説明があり、ゾリグ氏の功績を絵本にした書籍がティグレに贈呈されました。

ハルホリン市新首都構想とハルタル市長との連携

ウランバートル一極集中を解消するための国家プロジェクトとして進むのが「ハルホリン（カラコルム）新首都構想」です。私たちは８月４日、ハルホリン市のＬ・ハルタル市長をはじめ、主任建築家のバヤルバト氏ら幹部との会合を行いました。

ハルホリン市は、13 世紀のモンゴル帝国の古都カラコルムに位置し、現在は人口約１万人の町ですが、モンゴル政府は 2050 年までにここに人口 50 万人規模のスマートシティを建設するマスタープランを進めています。モンゴル国の全人口は約 345 万人ですが、わずか 20 年ほどで全人口の７分の１に相当する新都市を建設する意欲的な構想です。2023 年１月モンゴル大統領がこの構想のマスタープランを公募し、日本の建築家・隈研吾氏の日本チームほか６チームが入賞したことは日本でもニュースになりました。

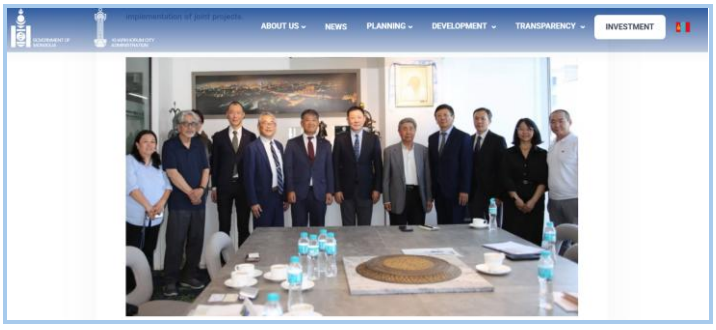
プロジェクトでは、敷地面積は 18 万 9363 ヘクタールに及び、居住区、新国際空港・物流ゾーン、観光特別ゾーン、1 万 8000 ヘクタールの農業経済特別ゾーンなどが計画されています。



新都市構想プロジェクトについて説明するハルタル市長

ハルタル市長との会談では、同市が直面するインフラ整備や環境対策において日本の技術や知見への強い期待が示されました。ゴミ処理・リサイクル技術、発電・省エネシステム、水処理施設、農業技術（富山県との協働による「チンギスゴールド米」の節水栽培等）、自動車整備などの専門職育成機関の設立などが討議されました。橋口相談役や高山会長からは廃材リサイクル技術等の提案も出され、ハルタル市長は「ハルホリン市内にジャパンタウン（日本街）を建設したい」と意欲的に答えました。後日、市長から共同ワーキンググループの設置と連携推進を定めた正式な感謝状がティグレ連合会に届き、民間レベルでの具体的な協働の可能性が広がってきました。

ハルホリン市長室ホームページに掲載された視察団の紹介記事



https://en.kharkhorum.gov.mn/post/177586

新モンゴル日馬富士学園と体験型交流の可能性

視察のもう一つの大きな柱となったのが、８月４日午前に訪問した「新モンゴル日馬富士学園」です。同校は大相撲の元横綱・日馬富士公平氏が 2018 年に創立した小中高一貫の私立学校です。

国際交流担当のオーガナ氏の説明によると、同校は「心・

知・体」を鍛える「ゴールデン三角」を教育理念に掲げ、挨拶や礼儀、清掃活動など日本の教育文化を取り入れています。小 4 から英語・日本語教育を実施し、倍率 5〜17 倍の難関校でありながら、学費は一般サラリーマンの給与 3 ヶ月分程度に抑えられています。

日馬富士理事長との対話の中で注目されたのが、同校が中学 1〜4 年生を対象に実施している「労働キャンプ」です。電気のない自然環境下で薪を拾い、火を起こし、ゲルを組み立てて生活するプログラムです。日馬富士理事長から、「物やインフラに恵まれた日本の若者にとっても、この不便な環境での労働キャンプは『あることへの感謝』と成長の糧になるはず。日本の高校生との合同サマーキャンプを実現させたい」との情熱的な提案がありました。また、「子どもたちに新鮮な無添加ミルクを飲ませたい」という想いから「日馬富士MILK FARM」を立ち上げ、学校給食でのミルク提供を実現させたという話もありました。この取り組みは現在、国家事業として全国展開が進められています。



中央：新モンゴル日馬富士学園理事長・日馬富士公平氏

今回の 6 日間の視察を通じ、モンゴルの都市課題の現実を知ると同時に、それを克服しようとする国家の力強い息吹と、次世代育成に情熱を傾けるリーダーたちの姿に直接触れることができました。日本の平均年齢 49 歳に対しモンゴルは 27 歳。モンゴルはとても若者人口が多い国です。単に年齢の違いだけではないようにも思いますが、知り合った多くの人からこの国を変えていこうというエネルギーを感じました。

討議し提案された内容は、私たちだけで対応するには過分なものもありますが、かつて上田会長が繋いだモンゴルの人たちとの交流と協力の輪を一歩でも前に進めるためのアクションを続けていければと思います。

最後に本視察を支えてくださった関係者の皆様、そして現地で温かく対応してくださったモンゴルの皆様に心より感謝申し上げます。



スモールヌイ（市政府庁舎）の前で、五十嵐理事長とともに

大阪日ロ協会が視察団 9月 ペテルブルクを訪問

大阪日ロ協会は、9 月 9 日〜14 日、サンクトペテルブルクへの視察訪問を行いました。これは 9 年ぶりのロシア訪問団です。ウクライナ戦争の開始以後、外務省の海外安全情報でロシアはレベル 3（渡航中止勧告）となっており、日ロの人的交流（とくにロシア訪問旅行）はこの 5 年間ほとんどストップしています。そんな中でもロシアの市民生活の実情を視察し、将来の関係改善と対話の糸口を探ろうと、ちょうど 9 月 11 日に『第 3 回日露学術交流シンポジウム』がペテルブルク国立経済大学で開催される日程に合わせて、視察訪問団を企画しました。

視察団には、紀田馨・事務局長（大阪府議会議員）、三浦寿子・副理事長（元大阪府議会議員）、高木浩司・あいちロシア協会常務理事（愛知県議会議員）ら 9 名が参加しましたが、現地では学術交流シンポに参加する五十嵐徳子・理事長（京都外国語大学教授）ら 4 名の研究者も一部日程に合流するなど、総勢 13 名の訪問となりました。

一行は、学術交流シンポの開会冒頭を見学したほか、サンクトペテルブルク市政府対外関係委員会の表敬訪問、露日友好協会ペテルブルグ支部での交流会・日本語教室見学、松尾浩樹・在サンクトペテルブルク日本総領事との懇談、今年 2 月に開設された日本ビザセンターの見学など、充実した視察日程をこなし、同時にペテルブルク観光を楽しみました。

第 3 回日露学術交流シンポジウム（9 月 11 日）

「日本とロシア、持続可能な発展への道」と題した日露学